

いつか読んでみたい、 あの本



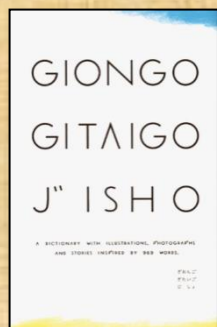
『海辺のカフカ』
上・下
村上 春樹著
新潮文庫
BF△1・2
篠崎ほか所蔵

この本を読みたいと思ったきっかけは竹内真著『図書館の水脈』を読んでからです。主人公の1人が図書館に泊まる経験をする部分がとても印象的でした。(羨ましい……) この作品中で『海辺のカフカ』でも図書館に住むエピソードがあると知りました。図書館に泊まる、住むなんて夢のようです。読んで私も図書館暮らし気分を味わいたいです。



『デイヴィッド・コパフィールド』
1~5
ディケンズ著
岩波文庫
B933テ1-5
篠崎ほか所蔵

読書好きの複数の知り合いから“絶対面白いから読んでみたら？”と太鼓判を押された本。いつの日か、との想いはあるものの、筆者にとって苦手な外国文学（カタカナの名が10人を超えると脳がパンクする）+2000ページを超える大著、という事に恐れをなしてはや数年。果たして読了の日は訪れるのか。



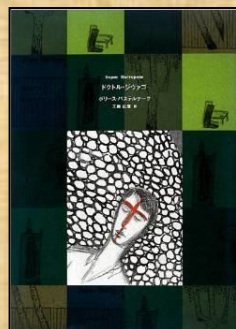
『ぎおんごぎたいごじしよ』
パイインターナショナル
814キ
篠崎ほか所蔵

以前に書店で見つけたこの本。表紙は洋書ようですが、実は“ゆらゆら”“ぎっくり”などの擬音語、擬態語を集めた辞書なのです。中はかわいい絵や素敵な写真が散りばめられていて、とてもオシャレな1冊。また今度じっくり読もうと思ひ、書店を後にして以来ずっと読めずにいます。



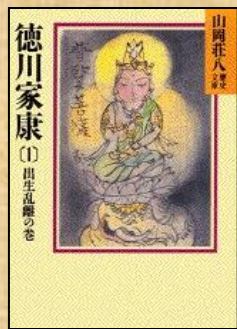
『遠野物語』
柳田 国男著
集英社文庫
B382ヤ
篠崎ほか所蔵

民俗学者・佐々木喜善によって語られた遠野地方にまつわる民話を、著者が筆記・編纂したもので民俗学のバイブルといわれています。妖怪や怪談が好きなので、このバイブルに挑戦しようと思ったのですが、文語体の難解さに二の足を踏んでいます。本書に挑戦して挫折してしまったら、現代語訳版を読んでみようと思います。



『ドクトル・ジヴァゴ』
ボリス・パステルナーク著
未知谷
983ハ
篠崎ほか所蔵

作者がこの小説で書こうとしたのは「言われるままに単純に物事を受け取ること避け、真に正しい道を歩もうと願う心」。ある本でこのことを知り、興味を持ちました。また、これが「滅び行く者たちの物語」であり、最後に主人公が書いたとされる素晴らしい詩集がついていることも魅力的でした。なのに、理由は分かりませんが、まだ読んでいません。



『徳川家康』
1~26
山岡 荘八著
講談社 山岡荘八歴史文庫
BFヤ1-26
中央ほか所蔵

徳川家康の一生を描いた長編小説。文庫で全26巻あり、世界最長の時代小説といわれています。大学時代に歴史小説にはまって、山岡荘八氏の作品をほとんど読破しました。しかし、この作品だけは、その膨大さに圧倒され当時は尻込みしてしまいました。各界の著名人達が愛読したという作品なので、時間に余裕が出来たら是非読んでみたいのです。

読書は一時のものではない。いつまでもつづくところに、よさがある。「読まない」ことをつづけることにも意味があるのだ。読書を「失わない」ことがたいせつである。

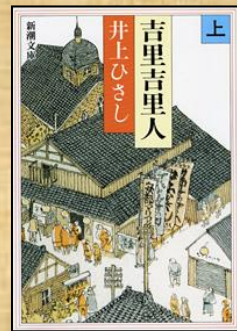
「忘れられる過去」 荒川 洋治著 みすず書房 914ア 篠崎ほか所蔵

第20回（2004年）講談社エッセイ賞を受賞した荒川洋治著「忘れられる過去」の中の一節。「ジャン・クリストフ」や「夜明け前」などの凄い本を学生時代に読んで、けろっとしている人は、卒業後、読書と無縁になり「卒業」してしまうことが多いと、荒川さんはこの中で書いています。ということで今回は、“いずれ読みたいけど、まだ読んでいない本”をご紹介します。これらの本は、私たちが読書を「卒業」していない証なのです……！



『戦争と平和』
1~4
トルストイ著
新潮文庫
B983ト1-4
篠崎ほか所蔵

読書家の彼が1年に1回は読み返すというので、その素晴らしさについて語り合いたい……と思いつつ未読のままはや3年。「アンドレイという冷淡な男が出てくるんだけど、女性にはすごく魅力的だと思いますよ」と言われ、悪い男に惚れる癖が再燃するのが心配でさらに読めなくなっている。



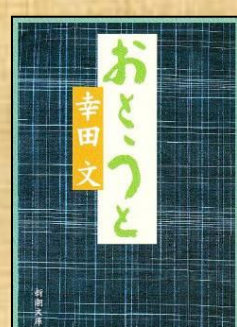
『吉里吉里人』
上・中・下
井上 ひさし著
新潮文庫
BFイ1-3
中央所蔵

ひょっこりひょうたん島の作者の小説です。同じ山形出身の藤沢周平は読んでいますが、この人の作品は何も手を付けていません。ふしぎな言葉づかいが展開されているようで、気になっています。日本SF大賞も獲っていて、名作です。



『ゲーテとの対話』
上・中・下
エッカーマン著
岩波文庫
B940ケ1-3
篠崎所蔵

「ファウスト」「若きウェルテルの悩み」「親和力」など詩集も含めゲーテを熱心に読んでいた頃、最後はこの本だと決めていました。しかし、「ヴィルヘルム・マイスター」を読み終わったときお腹いっぱいになってしまい、別の作家へと手を伸ばしてしまいました。以来、二度と読む機会は訪れませんでした。読めばきっと面白いはずなんです。



『おとと』
幸田 文著
新潮文庫
BFコ
篠崎ほか所蔵

両親の仲も経済状態も良くない、そんな家庭の中で17歳のげんは、三つ違いの弟に母親のようないたわりをしめす。だが弟はまもなく崩れた毎日をおくるようになり、結核にかかってしまう。重い内容の作品とわかるものはつい敬遠してしまいがちですが、今までの自分の考えとは違ったものも見えてくると思っています。いずれ覚悟を決めて読んでみたいと思っている本です。

番外編

いつか読み終わりたい、あの本



『魔の山』
上・下
トーマス・マン著
岩波文庫
B943マ1-2
篠崎ほか所蔵

この大作を初めて手に取ったのは、高校生の頃。第5章で挫折しました。次に大学生のときにも挑戦しましたが、またしても第5章で……。ところで、読もうと思う度に上巻を買っていたので、上巻だけが出版社違いで2冊、家の書棚にあります。

そのメロディに魅せられて♪

『ムーン・リヴァー』
（『エッセンシャル・アンディ・ウィリアムス』収録）
アンディ ウィリアムス G1ア04699 篠崎ほか所蔵

昔ハマった漫画の登場人物で、好きな女性から来る電話の着信メロディをこの曲に設定している男の子がいました。どんな曲なのか気になり聞いてみると、ゆったりとしたテンポときれいな曲調、加えて少し切ない感じが心に沁みる曲でした。その時、私が聞いたのは手嶋葵さんがカバーしたものだったので、次は有名なアンディ・ウィリアムスが歌うものを聞いてみたいと思っています。また映画「ティファニーで朝食を」の劇中でオードリー・ヘプバーンがギターを弾きながら歌うシーンがあるそうなので、いつか映画も見ようと考えています。